

十四 大嘗祭の御儀

穂を重さうにたれて、金色の波をうつてみた稲の取り入れはもうすんで、十一月二十三日には、新嘗祭の日がまわります。

天皇陛下はこの日、今年の初穂を神々にお供へになつて御みづからも新穀をきこしめすのであります。



新嘗祭の御儀は毎年行はれるもので

ありますが、天皇御即位のはじめの新嘗祭を特に大嘗祭と申してをります。

大嘗祭はわが國でいちばん尊い、いちばん大切な御祭であります。御一代に御一度神代そのままにかうがうしいこの御祭をあそばされるのは、實にわが大日本が、神の國であるからであります。

皇祖天照大神は高天原で五穀の種子を得られて、これを天の狭田の長田にお植ゑさせになり、やがてみのつてから、大嘗殿できこしめされました。皇孫瓊杵尊の御降臨の時、

「吾が高天原に、御す齋庭の穂を以て、亦吾が兒に御せまつる。」

と仰せられ、この稲を以て御祖先をまつり、御みづからもきこしめし、萬民にも與へるやうにとおさとしになりました。このやうなありがた、大御心にしたがつて、御代々の天皇はこの御祭をおごそかに行はせられたのであります。

大嘗祭の御儀には、まつ悠紀主基の二地方に分けて、新穀をたてまつる齋田をお定めになります。さうして、御祭は特に京都で行はれるのであります。



今上陛下の大嘗祭は、昭和三年十一月十四日から十五日へかけて行はせられました。御儀式は嚴肅をきはめたもので、夕方から始まりました。宵の御祭が行はれることになると、古式による御質素な殿舎が、闇につつまれ、ときどきもえあがる庭燎の火に、黒木の柱と庭の上の敷砂どが、ほのかに闇の中に浮かび出ました。

陛下にはこの時すてにしたしく、祓ひ、みそぎ、鎮魂の御行事を終へさせられ、御祭服もかうがうしく、神殿に玉歩をお進めになつたのであります。

まつ、悠紀殿に渡御あらせられて、御みづから、天照大神やほかの神々をおまつりになり、白酒黒酒を始めとして、齋田の新穀をお供へになり、御自身もまたきこしめされました。

この間、稻舂歌、風俗歌などがげだかく、ゆかしい調子でゆるやかに歌はれ、かうがうしさは一段と加はりました。これこそ、實に大神と天皇とが御一體におなりあそばす御神事であつて、わが大日本が神の國であることを明らかにするものと申さなければなりません。

宵の御祭が午後十一時過ぎにすみますと、今度は午前一時から、主基殿で、暁の御祭が始り、それが夜明け方まで續きました。

天も地もおのづから、森嚴きはまりないうちに、陛下は秋のゆたかなみのりについて、御禮をお申しのべになり、更に、民草のために、大神の御恵みをお願いになつたのであります。大御心のほどがかがはれて、まことにおそれ多いことでありました。

大嘗祭の終りには、國民すべてにこの大御心をたまはるおぼしめして、重たつた人々に酒饌をおくだしになつたのであります。

この日、帝國の臣民は、いづれも業を休み、おこなひをつつしんで、大御心を奉體し、一君萬民の至誠をあらはしました。私たちはこの記念すべき日を思つて、神の國日本に生まれた喜びと信念とを新しくするものであります。